博 士 学 位 論 文

－論文要旨および審査結果の要旨－

第 １５ 号

武蔵野音楽大学

はしがき

本編は学位規則（昭和 28 年 4 月 1 日文部省令第 9 号）第 8 条の規定による公表を目的として、令和３年度に本学において博士（音楽学）および博士（音楽）の学位を授与した者の論文内容の要旨および論文審査の結果の要旨を収録したものである。

目　　次

学位記番号	学位の種類	氏　　名	論文題目	頁
博甲第 24 号	博士(音楽学)	由 上 渓 子	ハインリヒ・マルシュナーのオペラと歌曲 ――物語り歌からの再考――	1
博甲第 25 号	博士(音楽)	賀　　頌 凱	ソーシャル・キャピタル論に基づく音楽活動の活性化に関する検討 ――高等学校吹奏楽部を対象として――	5

氏　　名	賀（が）　頌（しょう）　凱（かい）
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	博甲第25号
学位授与日	令和4年5月28日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項
学位論文題目	ソーシャル・キャピタル論に基づく音楽活動の活性化に関する検討 ―高等学校吹奏楽部を対象として―
論文審査委員	主査　教　授　　加　藤　徹　也 副査　教　授　　中　川　俊　宏 副査　教　授　　薦　田　治　子 副査　准教授　　森　田　恭　子 副査　　齊　藤　忠　彦 （信州大学　教育学部教授）

論　文　要　旨

本研究は、社会学や経済学などの分野で幅広く用いられているソーシャル・キャピタル論が吹奏楽の活動を活性化させるための要因となりうることを究明するものである。音楽活動をソーシャル・キャピタルの視点で分析することが可能であることを検証するとともに、活動を活性化する方策の探究を試みた。本研究は文献及び調査によるものであり、調査に際しては質的及び量的研究の双方を実施し、それぞれの分析結果を総合的に考察した。

本論文は、序論、本論５章、結論の３つの部分により構成されている。

序論においては、吹奏楽の活動の現状と問題点を整理したのち、研究の目的、方法などを述べた。

第１章では、文献研究を通してソーシャル・キャピタル論の発展の経緯、定義、内容について概観した。

第２章では、教育分野におけるソーシャル・キャピタルの概念を整理した後、教育を取り巻く９つのソーシャル・キャピタルの次元の存在について考察した。教育現場におけるソーシャル・キャピタルの構成要素の「態様」の例を挙げ、教育に及ぼす効果及び教育分野においてソーシャル・キャピタルを醸成する過程が明らかになった。

第３章では、吹奏楽の活動とソーシャル・キャピタルの関与性について分析した。教育分野における９つの次元を吹奏楽の活動の場面に対応させて13の次元に細分化し具体化した後、吹奏楽の活動におけるソーシャル・キャピタルの構成要素と形態に関する例を挙げて述べた。

第４章では、具体的な音楽教育活動を抽出し、本研究において着目することとしたＫ高

等学校吹奏楽部の活動場面に焦点をあて、山﨑（2008）の著書に基づいて、ソーシャル・キャピタルの視点に基づく分析を試みた。

第５章では、第４章までの理論的な分析と考察を通して得られた結果の科学性と客観性をより確実なものとするために、参与観察、量的調査、面接調査の３つの調査の実施を通して研究を進めた。参与観察では、吹奏楽部の活動を観察し、得られたデータを M-GTA により分析した。量的調査では、参与観察の結果を再度検証し、結果を補強するために共分散構造分析と探索的因子分析を行った。面接調査では、参与観察と量的調査から得られた結果を深化し補強するために生徒の発言を抽出して分析した。

以上の研究を経て以下の結論に至った。

吹奏楽部における 13 の次元の中で、K 高等学校吹奏楽部には９つの次元のソーシャル・キャピタルが存在しており、「ソーシャル・キャピタルの視点で吹奏楽部の活動を分析することが可能であり、吹奏楽部の活動にはソーシャル・キャピタルが既に存在している」という仮説は部分的に採択されたことにより、音楽活動におけるソーシャル・キャピタルの存在を確認することができた。

参与観察、量的調査及び面接調査を通して明らかになったことにより、音楽活動におけるソーシャル・キャピタルの形成及び活動の活性化を促す要素を10点提示した上で、露口（2016b）の言説と関連付けた場合、音楽活動の活性化の方策を以下の３点を提示することが可能である。

第１に、音楽活動の活性化ための「構造づくり」である。活動の運営者あるいは指導者は、活動のうちに存在する９つの次元の中で、人々や団体、地域との関わりを持たせ、社交・対話交流の機会がある「ネットワーク」を作り、校内での活動のみならず、部員の家族や関わりのある様々な人々、ならびに団体や地域との連携が必要である。

第２に、音楽活動の活性化ための「活動づくり」である。人々が参加したい、関わりたいとする活動であり、加えて、同じ目標と活動に対する思いがあることが必須である。なおかつ、魅力に満ち、質の高い、説得力のある活動を醸成されるために、日々の練習のモティベーションやシステマティックな練習方法の構築が重要である。活動を支え、指導を行う際には音楽表現の追求ならびに生徒の人間的な成長も重要視する。さらに、生徒自身が自分にとって何を獲得できるか、何のために活動しているか、他者に何を与えたいかについて意識し、人々が力を合わせて行動し、その中で「互酬性」の規範を高めていく必要がある。

第３に、音楽活動の活性化ための「関係づくり」である。音楽活動の９つの次元に関わる人々、団体や地域の間に、他者への理解や対人関係の形成・保持・向上するための知識や能力を獲得し、音楽活動を行うことで「信頼」を高めることが必要である。

本論文では、ソーシャル・キャピタル論に基づき、理論分析及び客観性のある調査方法を通して音楽活動を活性化させるための新たな視点を提示した。ただし、特定の高校の吹奏楽部を対象とする事例研究であり、そのことが本研究の限界と認められる。今後、ソーシャル・キャピタルの視点でより多様な音楽教育活動の分析を進め、ソーシャル・キャピタルの存在の確認と音楽教育におけるその有用性を検証する。

論文審査結果の要旨

申請者の論文は、高等学校吹奏楽部の活動の活性化に向けた方策をソーシャル・キャピタル論の視座から探究したものである。「ソーシャル・キャピタル」はアメリカの政治学者 R. パットナムが明らかにした新しい概念であり、人と人の関係性や繋がりを資源として捉え評価するという特徴から、政治学、社会学、心理学、経済学などの様々な分野で注目されている。人の絆の重要性が認識されている現代にとって、時宜を得た研究であるといえる。

本研究において評価できる点は以下の通りである。

第一にソーシャル・キャピタルの概念を音楽教育の分野に用いた研究は、国内ではこれまでに存在せず、この分野における先駆的な研究であること。

第二にソーシャル・キャピタルそのものの概念について、「既往研究におけるソーシャル・キャピタルの各定義」や「ソーシャル・キャピタルの諸形態」など、先行研究をもとに独自に整理、分類し体系化したこと。

第三に、ソーシャル・キャピタルの理論を吹奏楽部の活動の場面に対応させ、13 の次元に細分化することを提言し、３つの形態を示した点が独創的であること。

第四に、音楽活動におけるソーシャル・キャピタルの検証のために、ある公立の高等学校吹奏楽部を対象として、参与観察、量的調査、質的調査の３つの手法を取り上げることにより、相互補完的な分析や考察を行ったこと。

調査及び検証を通して、音楽団体活動の活性化をもたらすソーシャル・キャピタルの形成に必要な要素を明らかにし、「構造づくり」には「ネットワークづくり」が、「活動づくり」には「部活動そのものの内容の充実」が、そして「関係づくり」には、「他者の理解や対人関係の形成・保持・向上」が必要であると結論づけるに至った。

今後の課題としては、序論で「問題の所在」として指摘した競技性の追求や教師の多忙な状況が指導に及ぼす影響や、部活動本来の目的からの逸脱といった問題への追究が望まれる。また、検証事例を増やし、活動目的の整理や、それらと「活性化」の意味するところとの関係についてさらなる探求を行うとともに、結論として示されている活性化を促す 10 点の要素について、その客観的な根拠をさらに明らかにしていくことが望まれる。

本研究は、この分野における萌芽的な研究として位置づけることができ、その成果は今後の音楽教育分野に関わる研究への波及効果が期待される。また、部活動のみならず、教育の範疇を超え、他の芸術活動全般について論証できる可能性を秘めている。さらに、困難な状況下においても弛まぬ努力を続けた点も高く評価でき、研究者としての優れた資質が認められる。

以上により、本研究は博士学位授与に十分値するものであると判断した。

博士学位論文　**論文要旨および審査結果の要旨（ 第 15 号 ）**

令和４年８月６日発行

発　行　　武蔵野音楽大学大学院
編　集　　武蔵野音楽大学学務部
〒176-8521　東京都練馬区羽沢 1-13-1
電話 03-3992-1128